

スポーツ社会学者としての ノルベルト・エリアス

大平 章

(1) スポーツと余暇の社会学——興奮の探求

1954年にレスター大学の社会学部の常勤講師に就任したノルベルト・エリアスが最も力を注いだ社会学のテーマの1つは、スポーツの研究であった。今日でこそスポーツは、フィギュレーション理論、構造・機能主義、マルクス主義、批判理論、闘争理論、フェミニズムなどの多彩な方法論で研究されているが⁽¹⁾、それまではもっぱら体育学の分野に属し、正当な社会学のテーマとは見なされていなかった⁽²⁾。こうした状況でエリアスは彼の弟子であるエリック・ダニングと共に、自らの文明化の過程の理論に依拠しながら、スポーツのさまざまな面を分析し、それを1986年に『スポーツと文明化』に統合した⁽³⁾。それ以前に2人はすでに共同研究という形でスポーツ関係の論文をいくつか社会学の専門雑誌に掲載しており、『スポーツと文明化』は彼らのほぼ5年間におよぶ研究の集大成的な著書であった。それまで、エリアスは『文明化の過程』において、折りに触れ、芸術や文学と同レベルでスポーツや余暇活動の機能に言及したことがあったが、それはたいてい断片的であり、『スポーツと文明化』におけるほど歴史的な視野や心理学的なアプローチを含むものではなかった。

本書におけるエリアスの貢献は、まずスポーツという現象が人間の心理的な側面と連動しながら変化し、発展してきたという仮説、つまりスポーツの「心理発生」に関して独自の理論を展開したことである。この心理過

程は『文明化の過程』においても繰り返し強調されたが、端的に言えば、それは西洋社会のマナーやエチケットを一定の方向に推進した「自制の強制」というある種のフロイト的心理のメカニズムである。エリアスは基本的には、肉体を行使することで実現されるスポーツ活動を、人間の精神活動と切り離すことなく、つまり肉体と精神を二分化せず、両方が相互に依存しながら長い歴史の過程を経て変化してきたこと、これからも変化しうることを証明しようとしたのである。さらにまた、彼は、労働を価値のある社会的行為、余暇活動を価値のない時間の浪費と見なすのではなく、後者を、とりわけスポーツ活動を現代社会の重要な要素として分析しながら、それを社会学的に理論化しようとしたことでも注目し得る。

こうした問題はいずれも『スポーツと文明化』の英語版の主題である「興奮の探求」という表現と関係する。エリアスによれば、現代の高度に発達した産業社会では、暴力的性向や攻撃の姿勢を直接表わすことは一般に反社会的な行為と見なされる。暴力が一定の線を越え、長期化すれば、それは止めどもない内戦や政治革命の予兆になる。また、個人のレベルでも、もしわれわれが職場で憎い同僚や上司に殴りかかったり、異性に対して性的興奮を直接表わしたりすれば、われわれは刑務所や精神病院に行くことを余儀なくされるであろう。これに関連する事件（人種や宗教の対立による暴動やスポーツにおける暴力行為など）はマスメディアを通じてしばしば報道されてはいるが、それは、一般的には人間社会の正常な状態とは見なされない。現代社会は、暴力を根絶したわけではないが、少なくとも暴力的な行動を避けるような方向、殺人や殺傷を快く思わない方向、換言すれば、文明化の方向に発展してきたと言えよう。フロイトの言葉で言うなら、「原始的欲望」は「自我」や「超自我」の発達によって抑えられてきたのである（それゆえ、逆にフロイトの『文明とその不満』が示すように過度の自制に対する不満が現代人の心に鬱積する）。

実例を挙げれば、エリアスが言うように、現代人は中世の人々が楽しんだ「猫の火あぶり」、「熊攻め」、「罪人の処刑」などをもはや楽しいとは思

わないのである。残虐な行為に対するわれわれの嫌悪感のレベルは前進したのである。そういう意味では、人間は生まれつき暴力的ではなく、ある種の否定的な状況の長期的な連鎖が人間をそうさせるのである。とはいえ、現代社会は、古代や中世の社会に比べて、極度の自制により、日常生活のレベルでも、ある時には耐えがたいほどのストレスをわれわれに与える。その圧力は最悪の場合、人間を白昼夢や誇大妄想によるノイローゼの状態に追い込むこともある。エリアスは人間がこうした心的状況に陥らないようにするための対抗手段としてスポーツや余暇活動（芸術やダンスや音楽を含む）を重要視する。実際、テクノロジーの発展に伴う経済格差の減少によって将来、人間は労働よりも余暇活動に多く時間を費やすこともありうるからである。その場合、重要な点は、スポーツや余暇活動の時間が、労働による疲労を癒し、労働がもたらす緊張から逃れるためではなく、むしろより多くの楽しい興奮を求めるために費やされるということである。この興奮の領域は一定の度合いを越えた危険なものではなく、許された範囲の、「模倣的興奮」であり、たとえば、スポーツは、「社会がもたらす通常楽しくない抑圧による緊張」を相殺し、「楽しい、抑制された、感情の規制解除」を供給することになるのである⁽⁴⁾。それゆえ、スポーツの多くは——全部ではないが——暴力を行使する実際の戦闘ではなく、「模倣的戦闘」、「模擬戦」として行われ、また敵意や憎悪を直接表明するのではなく、それを「別の空間」に移し替えることによって、楽しい興奮が得られるように工夫されてきたのである。

その際、エリアスはアリストテレスの「カタルシス」の概念（元来それは体から不純物を取り去ることを意味したが、同時に浄化的、治癒的效果を持ち、われわれに楽しい興奮を供給することをアリストテレスは指摘した）に言及し、芸術や文学作品の浄化作用をスポーツや娯楽のそれに関連づけ、文明化の過程におけるスポーツと余暇についてより広範な議論を展開する。つまり、スポーツは、探偵小説、スリラー、演劇、音楽などが人間社会で果たしている機能と関連づけられるのである。その際、人間が長

期の相互依存関係の連鎖によって習得した自己抑制という性向は、スポーツそのものを暴力的で危険な状態に導かないで、ルールの設定などを通じて、それをさらに楽しい興奮が得られる度合いにまで高めるという機能を帯びるのである。したがって、スポーツの研究は、スポーツだけを個別に扱う方法では満足のいく理解は得られず、その心理発生と社会発生の研究が不可欠となるのである。端的に言えば、前者は西洋社会におけるマナーとエチケットの発展、およびそれに伴う人格構造の変化に関連し、後者はそれと連動する国家形成、とりわけ国家による物理的暴力の独占、徴税権の独占の過程と関連する。こうして、われわれは古代から現代にいたるまでのスポーツの変化——スポーツ化の過程——を、文明化の過程の理論に依拠しながら分析する意味を理解できるのである。

(2) スポーツ化の過程

エリ阿斯は古代ギリシャ・ローマから中世を経て、近現代へと変化する西洋のスポーツのさまざまな側面を具体的な資料に基づき歴史的に分析する。それは、現代のスポーツを絶対化するのではなく、それがあくまでも過去のスポーツと相互に関連しながら存在しているという「過程」への認識を深めるためになされるのである。この方法はエリ阿斯独自の発展社会学、過程社会学の根幹を成すものであり、彼のフィギュレーション理論が常に経験的な研究に根ざしていることを意味している。

現代でもその基本精神が神聖視されている古代オリンピックとはいったいどのような性格を持っていたのか。ギリシャ人はどのような種類のスポーツ——その時代にはまだスポーツという言葉が存在しなかったが——を行っていたのか。女性も男性もほぼ同じく、ギリシャの神々を称え、かつ死者の霊を慰めるために行われたこのオリンピアの競技大会に参加したのか。このような基本的な問いを発しながら、その答えを模索することからエリアスのスポーツ社会学は始まる。

エリアスによると、古代ギリシャのスポーツは多くの点で現代のそれとは非常に違っていた。その代表的な例は、パンクラティオン（pancratium）と呼ばれる現代のボクシングとレスリングを織り交ぜたような格闘技であり、体重別の組み合わせなどではなく、あるのは大人と子供の違いくらいであった。肉体的な暴力の度合いは高く、参加者は文字通り死闘を繰り広げたのである。この競技において推奨されるべき行為は、勝つことではなく、死をかけて最後まで勇猛果敢に戦うことであった。とりわけスパルタでは強い競技者が輩出した。エリアスは、勇敢に戦った競技者たちの石碑が彼らの故郷に建てられたという事実に言及しながら、ギリシャの男性の戦士としての価値がそこに辿られることを指摘している。肉体的暴力への嫌悪感のレベルは低く、「良心」という言葉さえも、自分の反道徳的な行為を責めるような現代的な意味とは異なり、神聖なる支配者、つまり神に忠実になることを意味していた。こうした事実は、われわれが古代ギリシャの精神文化や芸術に高い評価を置いていることと一見、矛盾しているように思われるが、エリアスによれば、そうではなく、この戦士の気風は古代ギリシャ特有の文化をむしろ積極的に反映しているものであった。つまり、古代ギリシャでは、肉体的に頑強で勇敢な男性こそが指導者の条件を備え、かつ貴族社会の構成メンバーだったのである。ソクラテスもプラトンもアリストテレスも理想とされるこの戦士の気風を体現しており、彼らは都市国家間の戦争では勇敢に戦い、また常にこうした戦闘に参加していたからこそ、彼らには「暇な時間」（*skhole*）〔学校の語源となったギリシャ語〕が貴重だったのである。

こうした事実から、エリアスは、古代ギリシャでは現代的な意味での国民国家は存在せず、存在していたのは絶えず戦争状態にあるより小さな単位の都市国家であったという結論を引き出し、今日の国家の概念をそのような都市国家に当てはめようとする現代人の認識の誤りを指摘する。さらに、都市国家のこうした状況は、現代的な意味での「和平化」が古代ギリシャでは実現されず、したがって、スポーツにおけるギリシャ人の暴力性

や攻撃性の度合いが高くなったことにも関連する。かくして、戦士の気風というギリシャの上流階級の人格構造（心理発生的側面）は、都市国家という国家形成の過程（社会発生的側面）と関関係にある。古代ギリシャのスポーツの社会学的診断は差し当たりこれで十分であろう。

一方、古代ローマにおいてもスポーツはローマの国家形成の段階に相応していた。ローマは周知のごとく、初期共和制から徐々に帝政へと移行し、ポエニ戦争での勝利を通じて大帝国へと成長した。その勢力はヨーロッパ中心部のみならず、北アフリカやイングランドにも及び、ローマは多くの植民地や奴隷を抱え、それを統治するには軍事力を絶えず強化する機能を国家に求めざるをえなかった。こうした状況をスポーツのレベルで反映しているのは、コロセウムで行われた奴隷出身の剣闘士と野獣の戦い、および剣闘士同士の戦いである。コロセウムでの剣闘士の残酷極まりない殺し合いは、キリスト教徒の殉教死と共にローマ市民に楽しい娯楽を提供した。反面、ローマは、スパルタクスの反乱に見られるように、大規模な奴隷の反抗運動に悩まされ、それを暴力的に防止せざるをえなかった。また、戦車競走を見物していた民衆もたびたび暴徒化し、今日のフーリガンのように、暴力行為に耽ったことが記録されている⁽⁵⁾。つまり、古代ギリシャと同様、古代ローマでも、現代的な意味での文明化されたスポーツの概念——たとえば、フェアプレーの精神やルールを順守する態度——が発展する余地はまだなく、暴力に対する嫌悪感のレベルはまだ低い段階であったということである。さらに、国家も市民を暴力や災害や病気から守り、人権を保証するような近代的な機能を備えてはいなかったということである⁽⁶⁾。

それでは次に、中世から近代初期にかけてのスポーツの発展過程を概括してみよう。エリアスはこの点についてもかなり信頼度の高い歴史的資料に基づいてその分析を行う。もちろん、中世には古代と同様まだ現代的な意味でのスポーツの概念は成立していなかったが、スポーツの形態やルールという点では、より現代に近づいていたことが分かる。エリアスは

中世という時代を、人々の生活様式、信仰、余暇活動の面で、他の人類学者や歴史学者にしばしば見られるように、理想化したり、ロマン化したりすることはしない。つまり、彼は、中世の人々の宗教への信仰は篤く、彼らが満ち足りた農耕生活を営んでいたというような捉え方はしない。エリ阿斯によると、中世の一般人の感情の起伏は激しく、彼らは喜怒哀楽を直接表現し、暴力への嫌悪感や裸体への羞恥心のレベルでもさほど前進していなかった。多くの人々は文盲で、聖書なども読めず、科学的な知識が乏しいので迷信を容易に信じたり、突然、敬虔な信者になったりもするが、教会などでは騒がしく、行動も粗野であった。が、それは、彼ら自身の道徳性が低かったのではなく、そのような社会で生活せざるをえない人間集団特有のハビタス (habitus) [人格構造] を彼らが共有していたからにすぎない。したがって、彼らが行っていたゲームも、現段階から見れば単純で洗練されていないかもしれないが、彼らなりの基準でそれを楽しんでいたのである。われわれは、ここでも、エリ阿斯がたびたび警告するように、現代のわれわれだけが最も文明化されたスポーツを享受していると考えてはいけないのである。

実際、中世期のイギリスではキリスト教の祝祭日（とりわけ懺悔火曜日）には老若男女を問わず、あるいはあらゆる階層や職業に属している人々が集まって、ボールのような用具を使って大掛かりないわゆる「民衆のフットボール」を楽しんだようである。もちろん人々はこのような機会を利用して日頃の鬱憤を晴らしたり、わだかまりを解消したりするために、あるいは楽しい興奮を味わうためにかなり暴力的な行為に及んだようである。こうした初期のフットボールはケンブリッジなどでは学生と村人の間でも行われ、村人たちが試合の場所に学生たちを呼び出し、隠し持っていた棒で彼らを殴って復讐を果たしたという記録もある。

さらにイギリスでは、兵士や民衆が軍務や仕事を忘れてこの種のフットボールに夢中になるので、国王や市当局がそれを禁止させるためにたびたび勅令やお触れ書き出したが、効果はなく、かなり手を焼いたようである。

あるいはフットボールを行っている間に、だれかが蹴られてけがをしたり、死んだりして裁判沙汰になったことにも言及されている。エリアスはここでもそのような具体的な例を経験的な資料としてかなり詳細に示している。

ともかく、この脈絡で重要なことは、先述した「猫の火あぶり」、「熊攻め・牛攻め」などの原始的で残酷なゲームを楽しんでいた中世の人々が、ほぼ同じような感情のレベルで「民衆のフットボール」を楽しんでいたことである。中世後期から近代初期にかけての「スポーツ化の過程」を説明する最も具体的な「民衆のフットボール」の例は、「ハーリング」(hurling)と「ナパン」(knappan)であり、それに言及することでエリアスは、スポーツ社会学の方法論上の有効なモデルを示唆している。

ハーリングはコーンウォル地方で行われたゲームで、東部地区ではゴールの方へ、西部地区では野原に向かってボールが投げられた。最初の種類のハーリングではそれぞれの側に15、20、30人くらいの選手が選ばれた。茂みが競技場として使われ、さらにその中にまた2つの茂みがゴールとして使われた。ゴールを防衛するために最も優れた防衛力のある選手が2、3人割り当てられた。その他の選手は2つのゴールの中間に集まり、そのどちらの側にも関係のない人がボールを投げ、そのボールを取って相手のゴールに入れた人が試合に勝った。さらに試合は次のように進行した。

ところが、その中にはきわめて困難な作業の1つが含まれている。というのはいったんボールを取った選手も相手の選手に近くで待たれ、捕まえられそうになるからである。相手はその選手の胸を握りこぶしで突き、阻止する……ボールを持っている選手が最初の敵をうまくかわしても、2番目の敵、3番目の敵がその選手を捕まえる……さらに彼が幸運で、きわめて敏捷なため、待ち受けている敵を払いのけ、追い越したとしてもゴールの所には彼を捕まえ、阻止しようとしている別の敵が1人、2人いる……ハーラーたちは以下のような多くの規則を遵守しなければならない。彼らは1対1でボールを投げなければな

らず、1度に2人が1人を転倒させてはならない。ハーラーはボールに激突してはならないし、相手のベルトの下を押さえてはいけない……自分自身よりもゴールの近くに立っている味方のだれかにボールを投げてはいけない⁽⁷⁾。

この引用を読んだだけでもこのゲームがラグビーの元祖であることが分かるが、それがレスリングにも似ていることも同時に推測できるし、粗雑なルールであるとはいえ、オフサイドのような反則がすでに発展しつつあることも理解できる。しかし、ゴールに向かってボールを投げるハーリングが、たとえば「こぶしを使って」という表現にも見られるように、物理的暴力の行使のレベルでは、とても近代的な競技場で行われるラグビーと同じだとは言えないし、そのような乱暴なゲームを楽しむことは現代人にはできないであろう。

さらに、野原に向かってボールを投げるハーリングでは、ルールにおいてサッカーやラグビーに似ている要素はまったくない。この民衆のゲームは規則に拘束されることが少ないがゆえに、より多様で、その形も雑然としていた。2、3人の紳士がこのゲームを行った。その際、彼らは休日などに東部や南部の教区民を連れて来て、西部や北部の他の教区民とハーリングの取り決めをした。そのゴールは紳士たちの家か、3マイルから4マイル離れたどこかの町や村であった。試合の様子は概ね次の通りである。

彼らが対戦するときには、数の比較も選手の組み合わせもない。がしかし、銀色のボールが投げられ、それをつかんで力と技でそれを決められた場所まで運んだ集団がボールと勝利を獲得することになる。このボールをつかんだ人は一般に敵の集団に自分が追跡されていることが分かる……ハーラーたちは丘、垣根、溝を越えて一番近い道を進んで行く。実際、茂み、茨のやぶ、ぬかるみ、水たまり、川と何でも越えて行く。というわけで、2、30人の人々がボールをわれ先に奪い取

ろうとして水の中でもつれあい、互いに戦いながら横たわっているのを見ることになる。競技は（本当に）乱暴である。がしかし、戦略を必要としているがゆえに、それはいくぶん戦争の作戦に似ている……。時々、敵に気づかれないでうまく逃げられる歩兵がこっそりボールを取って、それをずっと後方に運び、それから最後には迂回路を通してゴールまでもって行く。勝利が知らされると、勝った側は皆、大喜びでそちらに集まる。ゴールが紳士の家であるならば、人々は紳士にトロフィーの代わりにそのボールを与え、その上、彼のビールを飲みつくす⁽⁸⁾。

野原にボールを投げるハーリングは、参加する人々の多さに加え、ゲームそのものがまるで戦争さながらの様相を呈していて、現代人には珍しく見えるかもしれないが、ゴールに向かってボールを投げるハーリングに比べると、ルールの特長でも粗雑であり、現代スポーツから味わえるようなスリルや楽しい興奮は期待できない。しかし、エリアスによれば、こうした民衆のゲームは、民衆にとって楽しい興奮として受容できるゲームのレベルが現代のそれと違っていているということだけでなく、中世から近代初期にかけてのイギリスの社会の構造を解明するのにも役立つ。エリアスはイギリスの各地で当時行われていた「民衆のフットボール」を通じて、一方では、かつて農奴の状態で暮らしていたイギリスの農民が自由農民から成る田舎の人口に変化し、他方では、土地を所有している貴族階級と並行して、称号のない、単に「紳士」にしかすぎない地主階級（ジェントリー）が台頭してくる歴史を読み取ろうとする。つまり、それはこのようなゲーム（支配的エリート層にとっては文明化されたゲームではないが、自分たちの土地では習慣となったゲーム）を主催することで、ジェントリーが農民階級との結束をいっそう強め、国王や貴族の対抗勢力として自らを位置づけようとしたことを意味する。当時の社会構造の点から見て、さらに重要な問題は、初期の村落共同体は、しばしばロマン主義者によって美化され

るように、真に統合され、強い連帯感で一体化されていたのではなく、それぞれ近隣の共同体と対立しており、その対立を解決する手段としてこうした初期のゲームが地主階級によって組織化されたことである。

次に、「民衆のフットボール」として14世紀から19世紀頃までウェールズで行われたとされる「ナパン」に触れてみたい。このゲームに参加した人々は時々、2千人を越え、コーンウォルの「ハーリング」のように、参加者の何人かは馬に乗って試合をした。「騎兵」は大きな棍棒を持っていた。ゲームの主な内容は次のように説明されている。

この競技では個人的な恨みを晴らすことができる。したがって、どんなささいなきっかけでも彼らは喧嘩を始める。2人の間でいったんそれに火がつくと、すべての人間が両方の側で集団を作る。その結果、あなたがたは、5百人から6百人の男たちが集団でなぐり合う光景を見ることになる……かれらは石を拾い上げ、それをこぶしのなかに入れて相手をなぐる。騎兵が侵入して、歩兵部隊のなかに馬で突き進む。騎兵は手に入れることのできる最も大きな棍棒を選ぶ。それは、樫、トネリコ、サンザシ、野生のリンゴの木などで作られたもので、雄牛や馬をなぐり殺すことができるくらい大きい。騎兵はまたナパンを持っていない人を個人的な恨みでだれでも襲うし、そのひとが自分の方から攻撃を加えれば、その後でそのひとを棍棒でなぐる……このゲームには見物人などはいないのだろう。すべての人間が行為者にならないければならないのである⁽⁹⁾。

「ナパン」が、相手にけがを負わせたり、敵を殺したりする実際の戦争ではなく、あくまでも模擬戦であったとしても、そこで示される暴力の度合いの高さや、当時の人々が得ることができたと思われる同じレベルの楽しい興奮を、現代人が現代のスポーツ中で味わうことは無理であろう。「ハーリング」と同様に、そこには暴力に対する嫌悪感のレベルが中世期

の民衆の生活では進んでいなかったことが少なくとも分かるし、同じくそれが中世期に行われた「民衆のフットボール」（遊戯的闘争）の共通の要素であったことを知る必要がある。が、ここでも中央の統制団体やルール組織がまったくなかったわけではなく、それぞれの地方的特色を残しながらも、徐々に近代的スポーツとしての体裁や統一性を備えていく過程を経つつあったのであり、エリアスが強調するのもこの「過程」という概念なのである。つまり、「ハーリング」や「ナパン」は、現代の文明化された人々が行っている洗練されたフットボールとはまったく異質であり、それを楽しんでいた、あまり文明化されていない、どちらかという野蛮で残酷な中性の人々と現代人はまったく別の人種であるという「現代中心のイデオロギー」から離れることが重要なのである。これらの一見、不統一で乱暴な民衆のフットボールの名残が、ラグビーやアメリカン・フットボールのルールの一部にも見られること、したがって、そのようなゲームが少なくとも現代スポーツの原型や祖先の役割を果たしていたことを知ることが重要なのである。つまり、両者の間には長い相互依存の連鎖があるのである。こうした2種類のゲームの違いや相関関係を論じる際に、これ以上、中世における民衆のフットボールに言及する必要はなからう。

「民衆のフットボール」が時を経て、イギリスの名門パブリック・スクールにおいてアマチュア精神という道徳性を帯びながら、紳士階級の重要な肉体や精神の鍛錬の手段として独自の発展を遂げたこと、それがイギリスの教育上、あるいは国家形成上、重要な意味を持っていたことに言及すべきであるが、ここではエリアスのスポーツ社会学の中心概念である「スポーツ化」(sportization)と「議会主義化」(parliamentarization)の関連性に注目したい。

一般にわれわれは、「産業化」を「スポーツ化」の推進力と見なしがちであり、その理由にはかなり根拠があるが、前者は必ずしも後者の絶対的な条件ではない。確かに、産業の発達には都市人口を増大させ、その経済的基盤はスポーツの組織やその管理・運営団体に有利な条件をもたらす。そ

れに加えて、産業化はスポーツ選手や観客の供給源となり、とりわけプロスポーツにとっては、必要不可欠な機構を準備する。またスポーツを支えるマスメディアや医療機関も産業の発達なしにはありえない。半面、産業都市における極度の分業化や専門化がスポーツのプロ化に拍車をかけ、アマチュアリズムの存在基盤を弱めることで、金銭とは無縁の、真の喜びがスポーツから消えるかもしれない。あるいはまた、マルクス主義者が警告するように、業績中心主義が選手を商品化し、いわゆるスポーツにおける「人間疎外」が起こるかもしれない。こうした問題は世界でいち早く産業化を成し遂げたイギリスではすでに議論されていたことであるが、産業化、科学技術化がさらに進み、グローバリゼーションを迎えた今日においても、個々のスポーツに栄枯盛衰があるとはいえ、プロスポーツが消滅する気配はない。スポーツを中心とした余暇活動がますます必要とされるようになったのはどうしてなのかという問題は、スポーツ社会学が今後取り組むべき重要な課題の1つであろう。

ともかく、ここで注目されるべきことは、中世後期から近世初期にかけてイギリス各地で行われていた民衆のフットボールが時を経て——ある時はパブリック・スクールの重要なカリキュラムに採用され、またある時は、産業社会に生きる人々に娯楽もしくは職業を提供しながら——無計画のうちに、個人の予想をはるかに超えて、近代スポーツの様相を呈してきたことである。長期にわたる人間の相互依存の連鎖によって変化を遂げながら定着していくスポーツのこうした過程を、エリアスは「スポーツ化」と呼んだのである。エリアスは、たとえば、ドイツのスポーツ評論家の解説を引用しながら、「スポーツ」と「ジェントルマン」という英語が、他国語に訳せないという発言に注目して、「スポーツ化」というこの現象を社会的に説明している。つまり、フランス語起源の「スポーツ」という言葉が今や完全に英語化されただけでなく、世界の共通語にもなっており、スポーツにおける文明化の過程が、イギリスの国家形成の過程に重なっているのである。イートン校で主に行われたサッカーがたちまちヨーロッパの

国々に伝わり、それぞれの国にサッカーリーグが誕生したこともその一例である。

エリアスは「スポーツ化」を、因果的に「産業化」に並行させるのではなく、「議会主義化」との相互依存関係を通じて、その力学を解明しようとする。この「議会主義化」という概念はイギリスの支配層の人格構造を心理発生的に説明するものであり、それは自ずとスポーツの社会発生メカニズムを具体化する。端的に言えば、「議会主義化」とは議会での討論や議論を重視し、ある程度の妥協を通じて問題解決にいたるメンタリティであり、エリアスによれば、それはフランス人やドイツ人とも違うイギリス人独特の気風であり、長い歴史の過程を経て培われたものである。それは、イギリス人が元来、道徳的であり、そのような稟質を備えていたからではなく、たまたまそれを必要とするような歴史的状況に立たされていたからである。

周知のごとく、国王チャールズ3世の処刑が象徴するように、イギリスは、清教徒革命前後には暴力の悪循環という二重拘束に陥っていた⁽¹⁰⁾。つまり、フランスに先立ってイギリスでは、とりわけカトリックとプロテスタントの間で長い暴力の時代が続いたのであり、それから逃れるのは容易ではなかった。一方が権力を握れば他方は復讐を恐れた。脅迫や恫喝、暴力によるいじめや追放は日常茶飯事であり、国民はこうした暴力の応酬にうんざりしていた。が、徐々に議会での討議や説得を通じて政権交代を行い、政権を取った側は、それを失った側に対して卑怯な方法で復讐しないという方向にイギリス人は国家経営の活路を見出し、いわゆる「和平化」の道を歩み始めた。こうして「議会主義化」、「和平化」が「スポーツ化」を生み出すことになった。どちらが原因でも結果でもなく、それぞれが同時に進行したのである。「議会主義化」はルールや規範によって「和平化」への道を準備し、それに基づいてスポーツを楽しむという気風が自然にできあがったのである。かくして、多くの球技、たとえば、クリケット、フットボール、テニス、ホッケーなどに細かいルールが設定され、イギリスの

みならず世界中にそれが広まったのである。なぜ「スポーツ化」がイギリスで起こり、フランスやドイツで起こらなかったのか尋ねるのも興味深いかもしれない。

さらにスポーツの発展はそれを担う支配階級の力を必要とする。その方向をエリアスは、18、19世紀のうちに上流階級の重要な娯楽兼スポーツへと変貌した「狐狩り」に辿る。狐狩りに代表される狩猟は元来、農民やジェントリーが飼育している大事な家禽を害獣から守るために行われ、特に飢饉のときなど農民にはこれらの動物は貴重な食料になることもあった。ところが、「狐狩り」の本質は、火器などを使って人間が狐を殺すのではなく、猟犬が人間の代わりに狐を捕獲してくれることにあった。つまり、人間は馬に乗って、猟犬と一緒に獲物を追跡しながら、そのスリルを楽しみ興奮として、ある種のゲームとして追求することができるようになったのである。このイギリス独特の狩猟形態は、あまり外国人には理解されず、エリアスはその独自性を「確かに、あの狐はあれほど苦勞したなら、捕まえる価値がある。フリカンドーにすればうまかろう」というフランス人の言葉を引用して、示唆している⁽¹¹⁾。次の引用には、「和平化」と「スポーツ化」の不可分の関係がイギリスでは狐狩りによって象徴されていることが分かる。

イギリス式の狐狩りの習慣と初期の狩猟形態を比較することによって発見される狩猟方法の変化の方向は、文明化の勢いの一般的な方向を非常に明確に示している。肉体的力の行使、特に獲物を殺すことに対する抑制がますます強化されたこと、さらに、これらの抑制の表現として、暴力を行使する際に得られる快楽を、暴力が行使されるのを見る際に得られる快楽に置き換えることは、人間活動の他の多くの領域における文明化の勢いの徴候として観察される。これまで示されてきたように、それらはすべて、国家の中枢機関の代表による物理的権力の増大、もしくはその増大する有効性、およびその独占に関連する一

国家の、より多くの和解を促す動きに結びついている。それらはさらに、国家の内部的和解と文明化の最も重要な側面の1つと結びついている——つまり、これらの中枢機関の支配をめぐって繰り返し行われる闘争から暴力を排除すること、さらにそれに伴って生じる良心の形成と結びついている。獲物を殺すことにひとが直接加わることを禁じたイギリス式の狐狩りの習慣が、その全盛期において、文明化の勢いの表れであったということを考慮に入れるならば、暴力に対する社会的禁止のこのような増大する内面化、および暴力に対する、特にひとや動物を殺したり、さらにそれを見たりすることに対する嫌悪感の限界値の進歩が理解される⁽¹²⁾。

エリアスは、ここで「狐狩り」という、現代人にはあまりなじみがないが、かつてイギリスの上流階級にとって余暇活動やスポーツとして重要な地位を占めていた狐狩りを通して、「和平化」と「スポーツ化」の相互依存関係と相互補完的關係を見事に証明している。両者はどちらが先でも後でもなく、あくまでも並行して前進するのであり、因果関係によって支配されるのではない。が、それがベクトルのような一定の方向性と力を伴うには、「文明化の勢い」を必要とするのである。つまり、相互依存の長い連鎖が、ある種の社会的行為や習慣を、容認できるもの、適切なもの、あるいは不適切で排除すべきものという形で急速に基準化する方向に向かうのである。その一例は、かつて上流階級にとって、その社会的威信と価値観のシンボルとして存在したこの「狐狩り」が、現在のイギリスでは、残酷で非人間的な行為として廃止されていることである。もちろん、これは動物愛護運動、野生動物保護運動、環境保全運動などを支持する団体の力によって法制化されたわけであるが、これを、現代社会のある種の新しい「文明化の勢い」と見なすこともできよう。つまり、文明化された生活様式や行動の担い手が、かつてのエリート層から、その下位にいた階層に移り、産業化の波やそれに伴う「教育化」の進展によって、それに新しい価

値基準が加えられたことを意味する。それゆえ、エリアスの言う「かつて許されていたことが禁止される」という現象が（あるいはその逆の現象も）文明化の過程において起こりうるのである。それでは次に、「スポーツ化」ともう1つの重要な概念である「議会主義化」の相互依存関係に関するエリアスの結論的な見解を見てみよう。

国内の激しい闘争と対立の時代が終わった18世紀のイギリスにおいて、多極的な議会制度の機能が比較的円滑に発展したことによって、その問題が解決された。議会制度の漸進的な確立は極めて明白な和解の勢いを表わしていた。それは、たとえ同意された規則によって、相手方が政権を取り、その成果と権力資源を自分のものにすることができるとしても、もし関係しているすべての集団が暴力の行使を固く否定するとなると、必要になるようなより高いレベルの自制を要求した。比較的より暴力的で、あまりよく調整されていない地主階級の娯楽が「スポーツ」という表現にその現代的な意味を与えるようになった比較的穏やかで、より細かく調整された娯楽に変化し、さらに同じ時期に、同じ社会階級が暴力を否定し、政府を規制したり、また特に政府を交代させたりする議会の方法に高度な自制の形態を習得したことは決して偶然ではない。実際、議会の競争それ自体はスポーツの特徴をまったく欠いていたわけではなかった。さらにまた、これらの主として口頭による、非暴力的な議会の戦いは、楽しい緊張の興奮の機会を欠いてはいなかった。言い換えれば、18世紀のイギリスの政治制度の発展と構造と、同じ時期のイギリスの上流階級の娯楽のスポーツ化との間には明らかな類似点があった⁽¹³⁾。

「議会主義化」と「スポーツ化」のこうした類似点は18世紀以降のイギリスの国家形成の過程全体を支配するものであり、イギリスの文化や芸術、イギリス人の行動様式を決定する大きな要因となり、さらに、帝国主義的

な侵略を継続しながらも、その文化的影響力を植民地にも伝えるという方向を辿ったのである。エリアスは、ドイツの国家形成がイギリスのそれとは違ったコースを辿ったことを他の著書で度々強調している。つまり、彼によると、ドイツ人は議会での討論を無意味な単なる「おしゃべり」と見なし、ワイマール共和国以降も強力な指導者に政治的実権を委ねようとしたことで、最終的にはファシズムの方向に向かったのである。イギリスの歴史において「議会化」が果たした大きな役割をエリアスはさらに次のように分析する。

17世紀の終わり、および18世紀の初頭からずっと続いた変化と同じく、18世紀における上流階級の娯楽の変化は、国家全体の構造の中で起こっていた全体的変化に特徴的な特殊な問題を反映していた。それは、和解が進行し、特に政治的に最も強力なイギリスの地主階級に課せられた自己抑制が増大し、放逸な暴力を阻止する社会機構、つまり大部分はこのような階級そのものによって支配される機構がいくぶん効果的になるにつれて、ますます注目されるようになった問題であった。このようなかたちで増大した安全性がなければ、また国内の和解の前進がなければ、経済成長やますます成長する商業化はあまり効果を発揮しなかったであろう。かれらの間で進んだ和解と商業化は、人々の個人的な行動のよりいっそうの規則性に貢献し、かつそれを要求した。それは単に彼らの職業上の問題だけに係ることではなかった。生活上の行為のなおいっそうの規則性を促すこの傾向は、外的な規制だけによるものではなく、社会的に引き起こされた自制によっても支えられていた⁽¹⁴⁾。

エリアスがここで言及している「議会主義化」、すなわち議会政治における規則化された政治上の手続きや戦術は政治的レベルの変化だけではなかった。この引用でも分かるように、議会主義の発展、経済の成長、商業

上の成功が、人間の行動の規則性、自制の必然性を促したということであり、さらにまたその逆もありうるということでもあり、とどのつまりは、その合理的関係の意味が今やほぼ自動的に内面化される段階になったということである。これはスポーツのルール of 合理性を理解することと、ルールの順守によって得られる利点を納得して受け入れることの両方に関連する。このようなエトスがなければ、どのようなスポーツが発明されてもあまり意味はない。エリアスの言う「議会主義化」はこのように近代におけるイギリス人の人格構造の全体的な変化に関連しているのである。それはつまり、ルールのないスポーツは楽しめないという精神の出現であり、それは「和平化」を伴う「議会主義化」との長期にわたる相互依存関係の所産である。たとえば、それは、卑怯な手段で相手をだましたり、相手の肉体を傷つけたりして勝利しても、真の喜びが得られないという精神であり、ある時期には名門パブック・スクールのアマチュア精神やフェアプレーの精神と重なったのかもしれない。競馬、ボクシング、ゴルフ、ポロなどの他にもイギリス人が発明したスポーツは枚挙にいとまがない。また、ラグビーを始めたとされる W・B・エリス少年、ボクシングのグローブを発明し、自分の作ったルールを採用したジャック・ブロートン、近代ボクシングの基本ルールの規定に貢献したクィーンズベリー侯爵などのエピソードも発祥地はイギリスである。あるいは、国際的なスポーツで使用されるルールのほとんどが英語であるという問題も上記の問題と何らかの係りがあるかもしれない。がともかく、文明化の過程との関連でエリアスが社会学の課題として取り上げたイギリスのスポーツのさまざまな側面は以上のような例とその説明で十分であろう。

(3) スポーツと暴力

人間の自己抑制の習得が長い相互依存の連鎖を通じて、近代イギリスの歴史においてどのように「和平化」、「議会主義化」、「スポーツ化」に向か

って共同歩調を取りながら、数多くのスポーツの創発的な出現を可能にしたのか、さらにそれがいかにして制度化され、基準化されたスポーツの世界的な普及に貢献したのかという問題、つまり、スポーツにおける文明化の過程をわれわれは、エリアスの経験的資料に基づいた理論的統合によって具体的に理解することになった。スポーツにおける「文明化の勢い」は、今日ではグローバリゼーションの名の下で、「機能的民主化」（減少する差異と増大する多様性）を伴い、オリンピックやワールド・カップなどに見られるように、国際的なゲームという形を取りながら進行している。が、その反面、スポーツの国際化におけるこのような発展的な方向の中にも、さまざまな政治的、民族的、文化的対立が生み出す、観客同士の、あるいは選手と観客の間での、暴力行為が表面化していることも事実である。

その最も顕著な例は、1980年代から90年代初期に、とりわけイギリスの若いサッカー・ファンの間で吹き荒れたサッカー・フーリガニズムであり、それは1985年にベルギーのヘーゼル・スタジアムの悲劇で最悪の事態にいたった。ファン同士の乱闘によって多くの死人が出たこの悲劇は、当時のイギリスのサッチャー首相をして、国家的な恥と言わしめたほどであり、まさにスポーツ文化におけるある種の「非文明化の過程」を示唆するものであった。フーリガニズムに関連するこうした事実を念頭に置くと、エリアスの文明化の過程の理論が果たして正当であるのかどうかという疑問が提起されても当然かもしれない。が、フーリガニズムをどう解釈するかは別にしても、エリアス自身は、絶対に文明化された人間社会やスポーツについて論じているわけではないということを強調する必要がある。

エリアスによれば、人間社会において文明化は直線的に進行するのではない。それはある時は遅く、緩やかに、曲線を描くように進み、またある時は急激に、勢いよく（「文明化の勢い」という概念がそれを証明する）進行するのである。したがって、それは暴力の時代が長く続き、社会的異変によって急激に人々の恐怖感や不安感が増大すれば、元に戻ることもありうるのである（「非文明化の過程」）。要するに、文明化の零度がないよ

うに、完全な文明化の段階もないのであり、実際、人間社会はそのバランスの中で存在しているのである。したがって、われわれは「より多く文明化されている状態」か「より少なく文明化されている状態」の間を推移するのである。この点では、われわれはユートピア主義を捨てる必要がある。人間社会には完全な自由や平等があるわけではない。あるのは両方の概念の量的多寡であり、その際、言語上の比較級が決め手となる。

さらに、暴力と文明化の問題について言えば、「国家内部の暴力は抑制できても、国家間の暴力を抑制するのは難しい」というエリアスの見解を思い出すことも必要であろう。この定義も議論の余地があるが、暴力の多くがスポーツの国際大会において、自国のファンや選手ではなく、たいいてい外国のファンや選手に向けられることを思えば、あながち間違いとは言えない。政治や外交に不満を持つ国民や、スポーツの試合での判定を不服とするファンが、その腹いせに外国人が経営するレストランや商店を破壊したり、大使館を襲撃したりすることはマスメディアでしばしば報道されている。そのような暴力の噴出を抑えるのは国家当局にとっても容易ではない。しかし、こうした事実から「人間は生まれつき暴力的である」という定義を容認し、人々が暴力のはけ口を、戦闘的なスポーツやスリリングな余暇活動のみに求めることを肯定するのは正しい見解とは言えない。

ここで思い起こさなければならないのは、エリアスが指摘しているように、人間にとって自制を習得するには長い時間が必要であり、人間集団での長期に及ぶ相互依存関係がなければ、良心の形成（フロイトの言う自我や超自我）はありえないということである。したがって、ピューリタンとカトリックの間の暴力の応酬と、それに伴う彼らの相互不信感の増大を食い止め、両集団を「和平化」に向かわせるには相当な時間を要したことをエリアスがイギリスの歴史を通じて証明しているのは注目に値する。つまり、暴力の行使が「和平化」と「議会主義化」によって違反行為と見なされ、徐々に「スポーツ化」という形で楽しい興奮の追求に変容したことに注目しなければならないのである。

こうした歴史的な観点から見れば、サッカー・フーリガンたちは、行使される暴力と表明される感情のレベルの高さにおいて、「民衆のフットボール」の参加者に似ているし、フーリガニズムという現象そのものが、国家による物理的暴力独占の支配領域からはずれた、あるいは文明化の対抗勢力として、ある種の飛び地を形成していると言えよう。そのように解釈すれば、少なくともフーリガニズムを若者の異常で、常軌を逸した行動として捉える必要はなくなるかもしれない。とはいえ、それまでイギリス人は他の国民に比べて一般的に性格が穏やかで、おとなしいと思われたこともあって、多くのイギリス人は、それを国の恥と見なしたサッチャー首相に同調する傾向があった。フーリガニズムの原因についても、失業率の高いイギリスの若年労働者の国や社会に対する不満や反感、もしくは、60年代の「寛容な社会」によって蔓延した若者のエゴイズムや道徳的無関心などが挙げられたが、どれもあまり信憑性が高くはなかった。

こうした状況で、サッカー・フーリガニズムの根源や背景を社会学的にさらに深く分析したのは、むしろエリアスの弟子であり、共同研究者でもあったエリック・ダニングであった。エリアスの文明化の過程の理論は、西ヨーロッパの人々が中世後期より現代にいたるまで、自製の度合いを高めながらいかに暴力を排除し、基準化されたマナーやエチケットを受け入れざるをえなくなったかという問題に関心が向けられていたこともあって、スポーツにおける暴力の問題に取り組んだエリック・ダニングは、エリアスの重要な研究テーマを受け継いだと言えよう。実際、『スポーツと文明化』の最後の3つの章（「スポーツにおける社会的結合と暴力」、「フットボールにおける観客の暴力」、「男性の領域としてのスポーツ」）は、ほぼ彼の単独の研究に属するものである。エリック・ダニングのスポーツ社会学への貢献に関する詳しい言及は他の場に譲らなければならないが、ここではエリアスが彼独自のスポーツ社会学を展開するために使った方法論に関係のある課題だけに限定したい。

まずサッカー・フーリガニズム特有の暴力の形態と方法であるが、それ

は、最終的には、ドイツの貴族がその伝統的な地位と威信の象徴として共有した「決闘申し込み・受諾能力」(後にこれはドイツの一般市民にも受け継がれ、ナチズムの興隆を支え、さらに1936年に開催されたベルリン・オリンピックで強調された民族純血主義的な精神とも関連しているようである)のような集団内部の結束を高める儀式的暴力性に帰着する⁽¹⁵⁾。それは、階級の高低に関係なく、自分たちの集団の存在意義や価値観を——それが脅かされればなお激しく——守るために表明される。フーリガンの主力部隊は地位の低い労働者階級の若者(そうでない場合もあるが)であり、彼らは、急激な産業化やフェミニズムの台頭で、男性中心的な規範が脅かされ、暴力的な自己表現の場がなくなることを恐れているし、それを多くの人の前で誇示するには、サッカー競技場が最適の場所だと考える。

実際、フーリガンに似た観客集団は、20世紀の初頭からたびたび競技場で暴力行為に及び、警官隊と衝突を繰り返していたこともあり(ダニングは新聞などで報じられた観客の暴力の例をいくつか示している)、決して最近のフーリガンだけが暴力的であったわけではない。たとえば、1960年代の初期にも、テディ・ボーイズやモズのような不良集団の暴力的な行為への関与が、サッカー競技場以外とはいえ、取り沙汰されていた⁽¹⁶⁾。さらに、イギリスのパブリック・スクールでも、初期の頃はたびたび学生が反乱を起こし、学校当局は警官隊を出動させてそれを抑えるのに苦慮していた。また競技場での上級生の下級生に対する肉体的いじめもあり、ラグビーなどでも相手側の選手にけがをさせるほどの乱暴なプレーも容認されていた(ダニングはこの点で今日のスポーツでは、暴力はゲームに勝つために手段化されすぎ、そのため瞬間的に自制できなくなり、選手が暴力をふるう場合もあると言う)。

もちろん、これによってフーリガンの暴力が正当化されるわけではない。ともかく、フーリガンの場合、競技場の中だけでなく、競技場の外でも、たとえば電車やパブの中でも敵のファン集団がいれば、戦闘行為に及ぶの

である。つまり彼らは、スポーツの試合にではなく、暴力行為そのものに、普通の人ならあまり味わうことのない「楽しい興奮」を味わうのである。次の引用は代表的なフーリガンの一人の発言である。

おれが試合に行くのは、たった一つの理由があるからさ。喧嘩さ。そいつがいつも頭から離れなくてね、やめられないんだ。喧嘩しているときにゃ、いい気持ちになってパンツが濡れそうになるんだ……そいつを求めてイギリス全国を駆け巡るのさ……おれたちはその週は毎晩のように争いを求めて町をうろつくんだ。試合の前にはちゃんとした感じでうろつくのさ……それから、敵のような感じのするやつを見たら、時間を尋ねるのさ。そいつが金でも持ってりゃ、金も巻きあげてやるのさ⁽¹⁷⁾。

そのような暴力集団がどうして、どのように、どこで編成されるのかを社会的に分析（部分的結合による戦闘的な男性的規範の確立過程の分析）することがダニングの重要な作業となる。そのため、彼はエリアスの文明化の過程の理論に沿って、デュルケムが「機械的連帯」から「有機的連帯」への移行と見なした社会結合のパターンの変化に着目する。2つの概念は対極的というより、むしろ相互依存的な形で前者から後者に移行する。ダニングは前者を「部分的結合」、後者を「機能的結合」と定義する。その主な特色は次のように要約される。①「部分的結合」（自己充足的・原始国家制度的な共同体／権力バランスが支配者に大きく傾く／職業の範囲が狭い／狭い範囲での地縁や血縁による一体感／地理的移動性が少ない／肉体的暴力に対する自制が弱い／直接的な興奮を求める／暴力が日常生活で公然と表わされる／母親中心の家族・権威的な父親／男性優位／両親の子供への規制がゆるい／地元の諸団体が戦い合い、攻撃的男性性が強調される／スポーツは民衆の形態をとり、暴力のレベルが高い）②「機能的結合」（国家的に統合された、相互依存の広範な共同体／権力が平等化さ

れる／機能的相互依存による人々の結合／職業の範囲が広い／肉体的暴力への自制が強い／感情の抑制が強く、もっと静かに興奮を追求する／模倣的暴力によって代替的快楽が得られ、暴力が舞台裏に隠される／平等主義的な家族／男女平等／非暴力的手段によって子供が社会化される／人間関係が選択によって行われ、地位は、職業、教育、芸能、スポーツなどの能力によって決められる／スポーツは暴力の抑制された近代的な形態をとり、暴力は手段的に使われる)⁽¹⁸⁾。

「部分的結合」と「機能的結合」のこうした特徴は、普遍的でも絶対的なものでもないが、少なくとも、一方は非常に情緒的、感情的内容を持つ暴力の発生源となり、他方は個人的にも社会的にも暴力が厳しく規制され、かつ手段化、合理化される傾向を示す。フリーガニズムとの関係から見れば、「部分的結合」が重要な役割を果たすが、それは、「機能的結合」への急速な社会変化がなければ、さほど目立たないかもしれない。そういう意味では、むしろ、フリーガニズムは、現代産業やテクノロジーの発展で急速に分業化し、平等化（文明化）する社会にあって、失われつつある古い男性的な価値観（男性性の規範）を回復しようとする抵抗運動と見なすこともできよう。それはスポーツにおける暴力の問題を分析する上で重要なヒントになりうる。それはまた、性質こそ違うが、ドイツ国民が自国の失われた栄光を回復するために、ドイツ貴族の伝統的な「決闘申し込み・受諾能力」というエトスに依存したこととも重なるかもしれない。というのも、フリーガンの男性性の規範は、今日のそれとは違って、あるいは今日では受け入れられる可能性の低い、男性の頑強さや闘争能力に強調が置かれており、決闘の習慣に近いものだからである。それは、ライバル集団間の闘争（「われわれ集団」と「彼ら集団」の反目や対立）、復讐的な措置、帰属集団への一体感などいずれも戦士的な価値観を含んでいる。

さらに、フリーガンの中核部隊が労働者階級の「乱暴な層」によって占められていることも、フリーガニズムの注目すべき点である。なぜなら、それは、政治・経済的不満から、自分たちを抑圧している一部の特権集団

や政府に対する階級闘争として彼らが展開している反抗には見えないからである。エリアスはこの問題について、労働者階級全体をプロレタリアとして一括し、プロレタリアとブルジョアの階級闘争を歴史的必然と見なすことの危険性に触れている。エリアスによれば、労働者階級には、自分の子供の教育に関心を抱き、生活の改善に努力を惜しまない「良い層」がいるが、文明化された生活様式には縁のない層、つまり、「乱暴な層」もいて、後者が「最悪の少数者」となって労働者の居住区全体のイメージを悪くし、ひいては定着者集団による「汚名化」に屈するのである。このような層の多くは、産業社会の激しい変化にさらされ、生きるために各地を移動し、自分の共同体に一体感を持ってない状況の中で、さらにその乱暴な性格を次の世代にも伝えながら、悪循環を繰り返す、とエリアスは『定着者と部外者』の中で述べている⁽¹⁹⁾。ダニング自身は、『問題としてのスポーツ』において、フーリガニズムが世界的に拡大し、文明化された（機能的分化・民主化の進んだ）現代社会に対する反抗として、その暴力的な行動様式をますますエスカレートさせることを懸念しながら、宗教、文化、政治の対立によって引き起こされるフーリガニズムの複雑な闘争（「われわれ集団」と「彼ら集団」の複雑な対立抗争）のメカニズムが、エリアスの「定着者一部外者関係」の理論によって明確になりうると論じている⁽²⁰⁾。ダニングはまた同書で、北米のスポーツ（アメリカン・フットボールや野球）を例に挙げながら、スポーツと暴力の根深い関係を歴史的に探り、同時に、この理論をアメリカのスポーツにおける黒人対白人の変化する社会関係の分析、および現代スポーツにおいて重要な問題と見なされているジェンダー関係の分析にも応用している⁽²¹⁾。

(4) 結語

冒頭でも述べたように、エリアスは、スポーツ社会学がまだそれほど定着した分野として確立されていない時期に、その重要な研究のモデルを示

し、理論的發展の基礎を築いたことで多大な貢献をした。その最も重要な方法は、『文明化の過程』や『宮廷社会』でも示されたように、社会学の理論構築に当たって歴史的な事象を経験的な資料にすることで、理論それ自体をより信頼度の高いものにすることであった。マナーの發展と国家形成の関係、フランス宮廷社会の構造的特徴について触れるとき——その場合、もちろん文明化の過程の理論が常にその基本を成すものであるが——彼はある歴史時代の出来事や事象を、唯一無二性として個別に扱うのではなく、それをあくまでも人間社会全体との相互関連、相互依存を通じて多元的機能へと發展するものと見なした。同じことが『スポーツと文明化』についても言えるのであり、エリアスの社会学の方法論はさらにその一貫性を堅持し、具体化されている。その妥当性を示すには、すべての歴史的事実を扱うということではなく、いくつか選択された例を利用しながら、理論的統合にいたるまでの診断や調査が、形而上的仮説や前提ではなく、経験的な資料に基づいて綿密になされることが重要なのである。たとえば、スポーツの發展を扱う場合でも、古代ギリシャ、中世、近現代の枠組みの中で個々のモデルが段階的、發展的視野を伴って比較されていれば十分である。問題は分析の対象や研究の視野を現代だけに限定しないことであり、これが彼の言うフィギュレーション理論の中心的な要素である。

エリアスは、時代的、時間的経過を通じて變化するスポーツと暴力の関係をこのような方法論に従って分析したのであり、暴力の抑止法を具体的に提示するというよりも、むしろ、暴力は個々の人間や人間社会固有のものではなく、暴力を容認し、必要とする人間集団の諸関係に関連していること、それが自制を伴う人間社会の「和平化」に向かう動向によっていかに関わりうるかを証明しようとしたのである。その道筋は、古代の暴力的なスポーツ、中世の乱暴な「民衆のフットボール」、イギリスの紳士が自ら考案した規則に基づいて行われた「狐狩り」、イギリスのパブリック・スクールのより規則化されたサッカーやラグビーに辿られるのであり、同時にそれは、暴力を独占する国家組織の發展に連動するのである。

『スポーツと文明化』はそのようなスポーツの発展過程を具体的に検証する書として古典的な地位を獲得してきたし、そこで開示された方法論は、スポーツ社会学の有効なパラダイムとして多くの社会学者たちによって継承され、さらに発展の方向を辿っている。先述したように、その代表者はエリック・ダニングである。彼はスポーツ社会学の分野では『スポーツと文明化』のみならず、その他多くの論文や著書を通じて、エリアスの方法論を具体的に説明するだけでなく、それを応用し、とりわけ、スポーツと暴力の問題に直結するフーリガニズムの構造とその歴史を独自の観点から解明しようとしてきた。こうして、エリアスが先鞭をつけたスポーツ研究におけるフィギュレーション理論は、レスター大学で彼の薫陶を受けた研究者を中心に、いわゆるレスター学派を形成し、今日にいたるまでスポーツのさまざまな側面に新しいアプローチを試みている⁽²²⁾。もちろん、エリアスの方法論は絶対的ではないし、すでにそれに対する批判も他の社会学者から寄せられている⁽²³⁾。それを金科玉条として固守することはむしろその理論的後退を意味する。重要な問題はエリアスが示した方法論を将来いかにスポーツの新たな局面に応用するかということであろう。たとえば、問題の焦点が、国際的なスポーツ大会であるオリンピックやサッカーのワールド・カップだけでなく、パラリンピックのような身体障害者のためのスポーツ大会の歴史やその発展過程にも当てられるべきであろう。

注

- (1) スポーツ社会学の方法論については、Jay Coakely, *Sport in Society* (New York: McGraw-Hill, 2001), pp. 47-51 を参照。フィギュレーション理論についての解説は同書 pp. 47-49 を参照。同じく、Jay Coakely and Eric Dunning, eds., *Handbook of Sports Studies* (London: Sage, 2002), pp. 92-105 も参照。
- (2) スポーツ社会学の従来の地位については、N・エリアス、E・ダニング著、大平章訳『スポーツと文明化——興奮の探求』（法政大学出版局、1995）2頁を参照。同じく Stephen Mennell, *Norbert Elias: An Introduction* (Dub-

lin: UCD, 1992), p. 140 も参照.

- (3) 原典は Norbert Elias and Eric Dunning, *Quest for Excitement: Sport and Leisure in the Civilizing Process* (Oxford: Blackwell, 1986) であるが, 日本語訳では, 原典の主題が副題になっていることに注目.
- (4) 「楽しい, 抑制された, 感情の規制解除」(enjoyable and controlled decontrolling of emotions) という表現については, *Quest for Excitement*, p. 44 を参照. S. Mennell, *Norbert Elias*, p. 142, p. 158 も参照.
- (5) フーリガン (hooligan) という言葉は, 19 世紀の変わり目にロンドンに住んでいた乱暴なアイルランド出身の家族の名前に因んでつけられた. 同じような暴力行為は古代ローマでも頻発していた. 詳しくはエリック・ダニング著, 大平章訳『問題としてのスポーツ』(法政大学出版局, 2004) 83-84 頁を参照. 原典は Eric Dunning, *Sport Matters* (London: Routledge, 1999), pp. 47-48.
- (6) このエピソードについては, ヨハン・ハウツブルム著, 大平章訳『火と文明化』(法政大学出版局, 1999) 148-50 頁を参照. 原典は, Johan Goudsblom, *Fire and Civilization* (Landon: Penguin Press, 1992), pp. 117-18.
- (7) 『スポーツと文明化』(法政大学出版局, 1995) 269-70 頁.
- (8) 前掲書 270-72 頁.
- (9) 前掲書 335-36 頁.
- (10) 「二重拘束」(double binding) の概念については, S. Mennell and J. Goudsblom, eds., *Norbert Elias: On Civilization, Power and Knowledge* (Chicago University Press, 1998), p. 23, p. 30; Norbert Elias, *Engagement und Distanzierung* (Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1983), S. 73-184 を参照.
- (11) 『スポーツと文明化』(法政大学出版局, 1995) 232 頁.
- (12) 前掲書 236 頁.
- (13) 前掲書 250 頁.
- (14) 前掲書 251 頁.
- (15) 「決闘申し込み・受諾能力」(Satisfaktionsfähigkeit) については Norbert Elias, *The Germans* (New York: Columbia University Press, 1996), pp. 44-119; *Studien über die Deutschen* (Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1989), S. 61-158 を参照.
- (16) 「テディ・ボーイズ」(teddy boys) は, エドワード 7 世の時代の華美な服

装を愛用する 1950 年代, および 60 年代初めの英国の非行少年を指す.
「モズ」(mods) は 1963 年頃から現れた英国の若いビート族のこと. エド
ワード朝の衣装を着た 10 代の少年少女.

- (17) 『スポーツと文明化』(法政大学出版局, 1995) 359-60 頁.
- (18) 前掲書 342-43 頁.
- (19) ノルベルト・エリアス, J・L・スコットソン, 大平章訳『定着者と部外者』(法政大学出版局, 2009) を参照. 原典は Norbert Elias and J. L. Scotson, *The Established and the Outsiders* (London: Sage, 1994).
- (20) 『問題としてのスポーツ』 229-281 頁を参照.
- (21) 前掲書 179-218 頁を参照.
- (22) スポーツ社会学におけるレスター学派の研究は, スポーツと暴力(サッカー・フーリガニズム) やスポーツにおけるドーピング関連など多岐にわたっている. 主な研究書には以下のようなものが挙げられる. Patrick Murphy, John Williams and Eric Dunning, *Football on Trial* (London: Routledge, 1990); Eric Dunning, Patrick Murphy, Antonios E. Astrinakis, eds., *Fighting Fans* (London: Routledge, 2002); Eric. Dunning, Dominic Malcolm and Ivan Waddington, *Sport Histories: Figurational Studies of Modern Sports* (London: Routledge, 2004); Ivan Waddington and Andy Smith, *An Introduction to Drugs in Sport* (London: Routledge, 2009).
- (23) フィギュレーション理論への批判や弱点については, Jay Coakely, *Sports in Society*, p. 47-49 の他に Ellis Cashmore, *Sports Culture: An A-Z Guide*, (London: Routledge, 2000), pp. 107-109 も参照.